島根県斐川町におけるハトムギ栽培の取組

斐川町農林事務局　狩野　直
（島根県東部農林振興センター出雲事務所農業普及部）

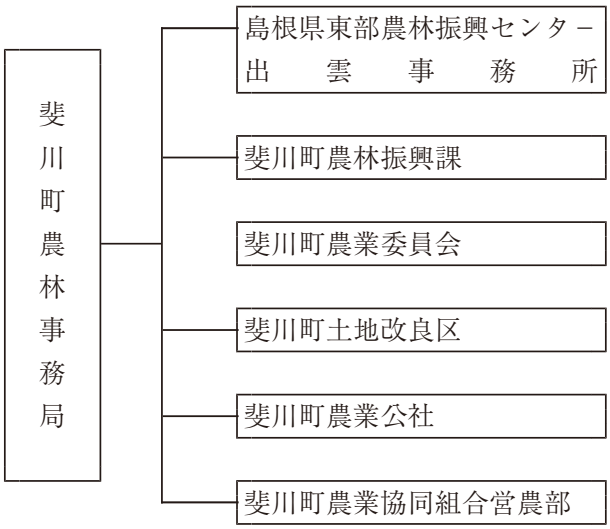
Ⅰ．斐川町の農業概況

斐川町は県の東部宍道湖の西に位置し、これに注ぐ１級河川斐伊川沿いに開けた平地農村で、水稲を中心とした水田農業地帯である。販売農家戸数は1,381戸、耕地面積が2,390ha（内水田本地面積2,250ha）で、99％以上が基盤整備済みとなっており、大区画の率も県内では最も高い。

町では昭和30年代から関係機関・団体が一緒になった町農林事務局体制が採られており、農業全般の推進役として機能している。平成９年に農業基本構想（アグリプラン21）を定め、担い手の育成や作物別の振興、農村の振興に努めてきており、平成20年度末現在で、認定農業者81経営体、集落営農組織36組織が誕生し、町内の約65％の水田を経営するに至っている。

平成20年産の主な栽培作物は、水稲1,439ha、大麦384ha、大豆304ha、ハトムギ41ha、ひまわり23ha、飼料作物109ha（水田放牧20ha）タマネギ20ha、キャベツ16ha、ブドウ７ ha、青ねぎ、白ねぎ、シクラメンなどである。

斐川町農業推進体制（平成21年４月現在）



Ⅱ．新たな土地利用型作物を検討するに至った経緯

品目横断的経営安定対策等、新たな政策についての情報が出てくる中で、以下の理由等から新たな土地利用型作物の選定を行うこととなり、平成18年度に試験栽培を実施した。

1．麦・大豆の過去実績が無いところの対応
2．産地づくり交付金（現産地確立交付金）等にできるだけ頼らない経営作物の模索
3．排水対策が十分にとりにくい地帯での転作作物の導入
4．担い手として新規の集落営農組織が多数設立し、どう経営を図るかが大きな課題

Ⅲ．ハトムギを重点作物として選定した理由

JA が中心となり、米を始めとした産物の販売促進を図る中（フーデックスジャパンへの参加等）で、国内大手の雑穀業者から示唆を受け、試作栽培を実施し、その結果を踏まえた上で以下の条件等から産地化の取組を開始した。

1．国内の産地が少なく輸入に依存
2．かび毒（アフラトキシン）の問題で国内産に対する需要が拡大
3．消費者の健康志向が高まる中、漢方での薬効が広く認知
4．既存作物（麦・大豆等）に比べ、湿害の心配が少
5．既存の機械化体系で栽培が可能

Ⅳ．ハトムギ栽培の経過

1．栽培面積等生産面

○平成18年度

３経営体で試作を開始（栽培面積2.5ha）
品種：はとひかり、はとじろう
播種：６月10日～６月18日

収穫：10月２日～10月21日

○平成19年度（試験栽培初年目）

５経営体で約24haの栽培面積

品種：はとひかり

播種：５月26日～６月18日

収穫：９月26日～10月25日

○平成20年度（試験栽培２年目）

12経営体で41haの栽培面積

品種：はとひかり

（あきしづく試験栽培10ａ）

播種：６月６日～７月中旬

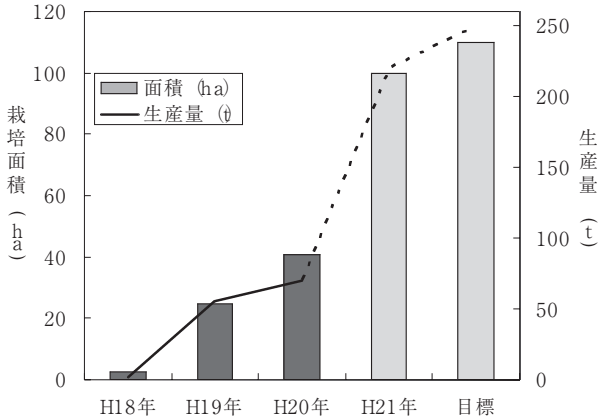
収穫：10月９日～11月５日

○平成21年度（本格栽培初年目計画）

24経営体で101haの栽培面積予定

品種：はとひかり、あきしずく

播種：５月中旬～６月



ハトムギ生産推移（実績と計画）

２．斐川町農林事務局の取組等支援面

○平成18年度

・他産地の情報収集や島根農試の試験成績に基づき栽培指針（暫定版）を作成、その後栽培状況を確認しながら逐次改訂

・試作ほの生育状況、生産性の確認と品種の選定

○平成19年度

・町の重点作物に選定し水田農業ビジョンに掲載、産地づくり交付金等の対象作物に位置付け

・普通型コンバイン１台導入し収穫受託体制を整備

・乾燥にJAの共同乾燥施設を活用（米や大豆との関係で時期の制約大）

・栽植密度（密植）試験の実施

○平成20年度

・生産者組織の結成支援（４月にJA斐川町ハトムギ部会設立）

・全国ハトムギ生産技術協議会への参画

・加工品開発検討（10月から発芽はとむぎ茶販売開始、キャンペーンの実施）

・試験研究組織等との連携強化による機能性等の検討開始（島根大学、島根県農業技術センター、同産業技術センター）

・国の産地生産拡大プロジェクト支援事業で乾燥調製施設・低温貯蔵施設建設決定

・JAを中心とした販売先の確保

・施肥試験の実施

・「あきしずく」の現地適応性確認試験の実施（種子確保ができしだい品種切替）（農研機構と種子についての許諾契約を締結し採種）

ハトムギ茶のパッケージ

○平成21年度計画

・乾燥調製施設・低温貯蔵施設の竣工（６月）

・町単独のひかわ産地拡大支援事業で機械導入等の助成

・全国ハトムギ生産技術協議会夏期研修会の開催（７月）（品種比較圃の設置８品種

他）
・新しい加工品の開発検討　etc

Ⅴ．斐川町におけるハトムギ栽培の特徴

1．大区画圃場を含め基盤整備田を用いた大型機械による省力栽培
2．集落営農組織を中心とした団地栽培
3．大麦跡の栽培が多く、水稲－大麦－ハトムギの２年３作ブロックローテーション
4．大豆や大麦の播種技術を取り入れ、条間30cm の密植栽培を導入
5．収穫後は全てＪＡの共同乾燥施設に搬入し、製品の均一化を確保

Ⅵ．ハトムギ生産振興上の課題

1．全国的に栽培面積が拡大しており、きちんとした販路の開拓が重要であるとともに加工品の開発等によって生産者所得の向上を図る必要がある。
2．マイナー作物であり病害虫対策の手段が限られる。現在も重要病害である葉枯病に強い品種の育成がなされつつあり、継続した品種の検討も必要である。合わせて種子の確保対策をきちんとしていく必要がある。
3．草丈が高いこと等から管理作業が実施しにくい場面が多い。一発型肥料の検討等を進めながら作物にあった管理方法を構築する必要がある。
4．産学官連携や農商工連携を進め、消費者へ対する機能性のＰＲ等によって国産の消費拡大に結びつけることも必要である。
5．栽培年数が短く、新規の栽培者も多いことから、技術の平準化が大切となる。
6．マイナー作物のため農業共済制度が無い。台風等の気象災害が起きた場合の所得保障等が今後の定着化の課題となる。

Ⅶ．斐川町における今後の方向性

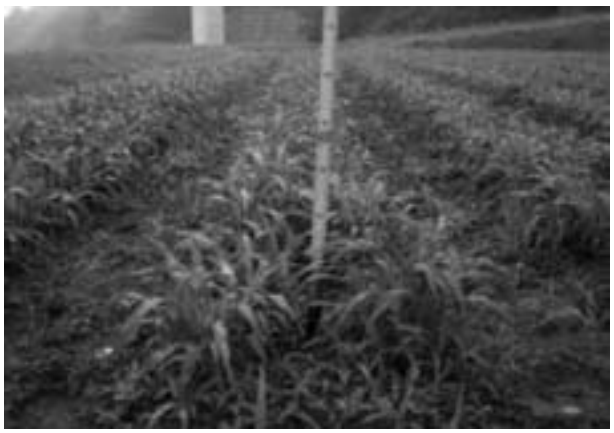
平成21年産は市町村別に見ると全国でも有数の栽培面積となる。今後は生産者間のレベル差を少なくし、単収の向上と高品質生産に努め、実需者に信頼される産地の確立を目指すとともに、加工品等の開発・販売により付加価値を高め、斐川ブランドの定着を図っていくことが目標となる。

（参考）　斐川町におけるハトムギ生育経過事例

５月26日播種のＫ営農組合事例（平成19年産）
条間間隔30cm 及び75cm の交互播種
基肥：牛ふん堆肥(4/21)２ｔ、アラジン484(5/19)30kg
追肥：硫安(6/16)20kg、アラジン403(7/28)30kg
防除：除草剤１回、殺虫剤２回、殺菌剤２回
中耕：硫安散布時

○６月５日撮影（出芽揃い、出芽良好）

○６月19日撮影（分げつ２本、中耕）



○６月26日撮影（草丈30cm）

○７月６日撮影（草丈70cm）

○８月10日撮影（出穂盛期）

○同左（子実の状況、人の背丈程度）

○８月27日撮影（熟れ色見え始め）

○９月26日撮影（収穫）